

伏見桃山東陵、桓武天皇柏原陵の三陵が位置する。当地は、豊臣秀吉により伏見城が築かれており、その本丸が伏見桃山陵の北端を一部含んだ山上にあったことが絵図などによってうかがわれる。

今回、陵墓地内の防災整備工事が計画され、防火貯水槽（内法長さ八メートル×幅五メートル×深さ二・五メートル）を設置することとなった。設置予定地は伏見桃山東陵拝所の東方に位置し、伏見城関係の施設としては学問所があったとされる箇所付近にあたる（第22図）。現状では平坦な地形を呈している。そのすぐ南側の崖下には大きく入り込んだ船入がつくられていた。当部では平成一〇年度に予定されている当該工事の際の調査に備えて、事前に遺構・遺物の存否、その性格・時期等を確認し、今後のデータとするため、平成一〇年一月二六日～二九日まで試掘調査を行った。

調査は貯水槽設置予定箇所以北トレンチ（長さ五メートル×幅二メートル）、南トレンチ（長さ三メートル×幅三メートル）の二本のトレンチを設け、最大二・三メートル掘り下げた。その結果、地層はⅠ層 表土、Ⅱ層 盛土A、Ⅲ層 旧表土、Ⅳ層 盛土B、Ⅴ層 地山となつていた（第23図）。Ⅱ層は南トレンチでのみ認められ、その上面は東陵拝所のレベルに対応している。同時期に整地されたものであろう。Ⅲ層も南トレンチで確認されたのみであり、陵所整備以前の地表面と考えられる。本層から瓦溜まりが掘り込まれている。Ⅳ層は地山の土をブロック状に含み、瓦や石垣の石材を含んでいる。一気に盛り上げられたもので

あろう。Ⅴ層の地山は北側から南側にかけて緩やかに下降しており、旧地形に対応しているものと考えられる。

遺物としては、瓦溜まりやⅣ層から多くの瓦が出土している。大きさは一〇センチ×一〇センチにも満たないものが多い。そのほとんどは黒く燻した燻瓦である。平瓦と丸瓦が認められ、棧瓦は含まれていない。これらは厚さ一・五センチ以上を計る厚手の製品で、丸瓦は玉縁を有するものである。赤変したものもあり、二次焼成を被ったことを示すものであろう。

調査の結果、伏見城に直結するような遺構・遺物は確認できず、平成一〇年度の本工事の際には、本部職員も参加する立会調査で対応することとした。

（福尾 正彦）

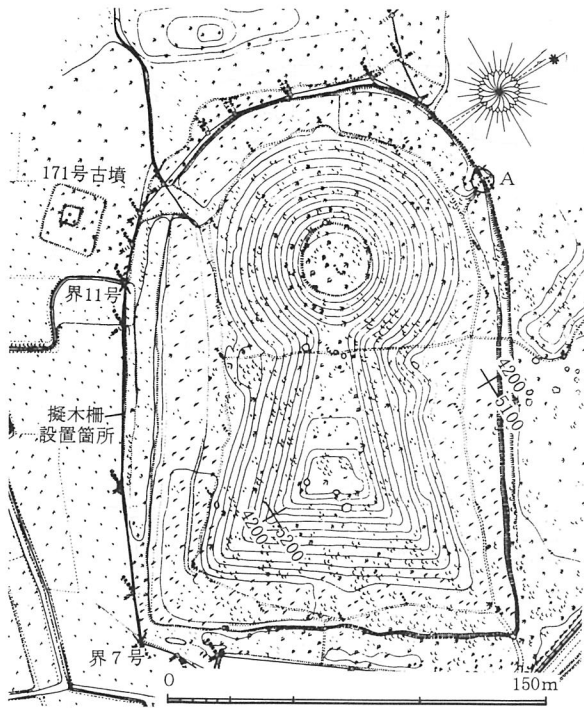
#### 男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地擬木柵取設

#### 工事箇所の立会調査

宮崎県西都市に所在する男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地内の男狭穂塚と女狭穂塚は、全国的に見ても有数の規模を誇る古墳である。平成六年度に外周埴垣改修その他工事が施工され、男狭穂塚の西側部分から女狭穂塚西括れ部付近に対応する外周部分約四七〇メートルに関しては、金網フェンス柵が取設けられた。この度、前回施工されなかった女狭穂塚西括れ部付近から前方部西南隅角部分までの一四〇メートル区間に、擬木柵の設置工事が実施されることとなった。そこで、平成一〇年二月二四

日(三月二七日)の工期中には西都原古墳研究所長日高正晴氏に立会調査を委嘱し、また同年三月九日(一日)にかけては本部職員による立会調査も行い、工事によって遺構遺物が損傷されることのないよう、万全の配慮を行った。

調査箇所は女狭穂塚の前方部から見て、左側外堤の外法裾部付近に当たる(第24図)。境界外はかつて桑畑があったところで、現在は空地となっている。今回、擬木柵の杭基礎(最大で長さ〇・九メートル×幅〇・九メートル)を境界線沿いに九五箇所掘削した。その結果、遺存状



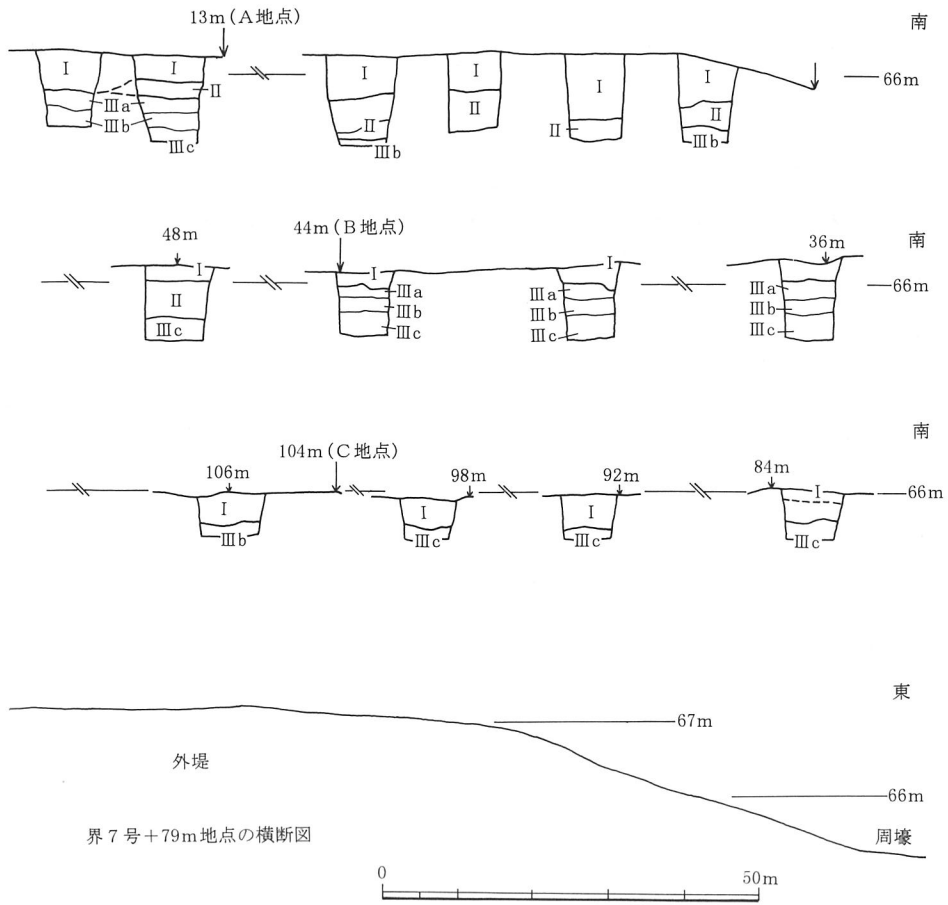
第24図 女狭穂塚陵墓参考地調査箇所の位面関係図 (1/3000)  
(縦横距原点は陸地測量部二等三角点折登)

況の良好な箇所では以下の三層に区分できた(第25図)。

- I層 表土。黒色の腐植土。
- II層 盛土。III層のアカホヤをブロック状に含む暗黒灰色土。
- III層 地山。上層からアカホヤ(III a)、黒褐色土(ブラック・ベルト、III b)、褐色土(III c)となる。

今回の調査区間が一四〇メートルにも及ぶため、地層に数箇所の変換点を認めることができる。便宜上、外堤外法西北隅角部に所在する界七号を起点として、記述を加えることとする。

まず、界七号から一三メートル北西側(A点)までは、地表から約一・一メートルまではI・II層であり、一部の床面付近に黒褐色土(III b)が認められた。つまり、アカホヤ(III a)は確認できなかった。アカホヤがカットされた段階で盛土がなされたと考えられる。さらに約四メートル地点(B点)までは、I層下にアカホヤ(III a)が直に接しており、盛土であるII層は観察できなかった。次の約一〇四メートル地点(C点)までは、一部にII層を欠く箇所もあるものの、その下位は褐色土(III c)となっており、アカホヤおよび黒褐色土がカットされていることが知られた。最後の一四〇メートル地点(D点)までは同様にI・II層の箇所が認められるが、アカホヤ(III a)は観察できず、黒褐色土(III b)または褐色土(III c)であった。アカホヤが検出された箇所のレベルは標高六六メートル弱で、ほぼ一定している。旧地形を知る上での目安にはなろう。



第25図 男狭穂塚女狭穂塚参考地調査箇所断面図 (1/100)

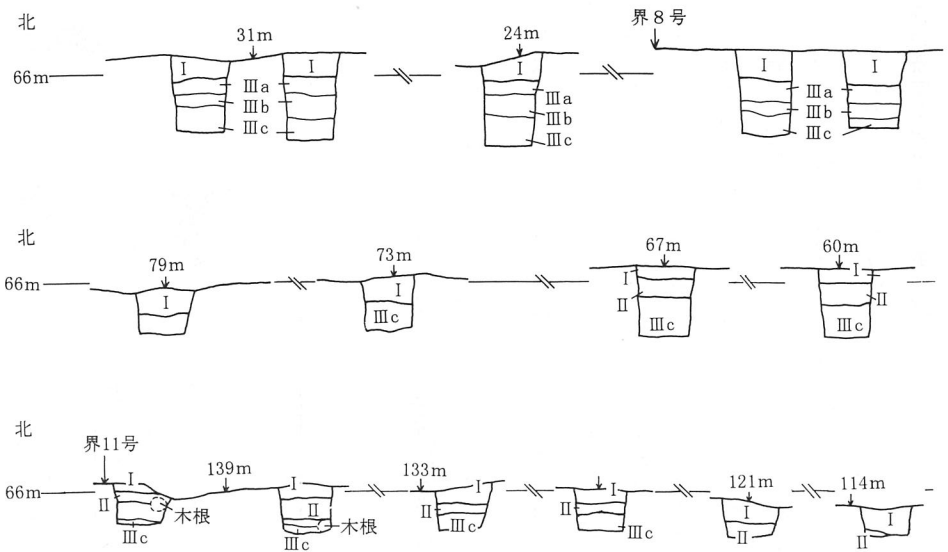
これらの所見から、今回の調査地である女狭穂塚の外堤外法裾部は地上層であるアカホヤはもとよりその下位の黒褐色土までがカットされた箇所が認められた。また、後に盛土されたりするところがあるなど、全体的に大きく手が加わっており、本来の外堤の形状等に関する情報は得られなかった。参考までに現外堤の横断面図を添えておく(第25図下)。

以上の調査結果に基づき、工事は予定通り施工した。今回の調査箇所における出土品は皆無である。

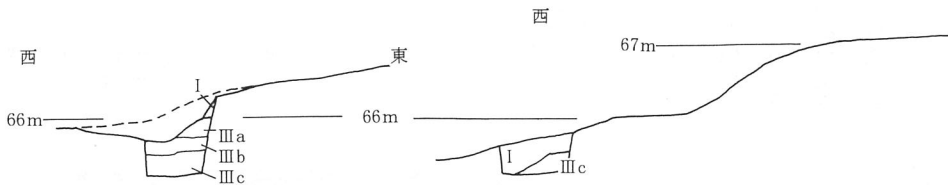
なお、墳丘表面調査の際に埴輪片等を採集したので、この機会に報告しておく(第26図)。

埴輪(1) 男狭穂塚と女狭穂塚を結ぶ巡回路(第24図A)の切り通し面で三点採集した。おそらくは女狭穂塚の外堤に樹立されていたものと考えられる。いずれも小片であるが、淡いベージュ色の外観と内芯が黒灰色を呈し、胎土に多くの小く中砂粒などを含むという、従来から知られている特徴を有する。1は朝顔形埴輪の頸部付近である。外面に、タテハケで調整された痕跡をわずかにとどめている。

土師器(2) 男狭穂塚後円部西側斜面で表採されたものである。胎土には若干の砂粒や雲母などを含むもの



調査箇所 の 東壁断面図



界7号+36m地点の横断面図

の、精良であり、埴輪の胎土とは明らかに異なる。天地左右、傾き等を確定しえないが、壺もしくは甕の底部付近に相当するであろうか。外面は器表の荒れ具合からみて、上半部と下半部で調整が異なっていると考えられる。内面は丁寧なナデで、平滑に仕上げられている。

須恵器(3) Aのやや北側で採集したもので、男狭穂塚や女狭穂塚との関係は明確にしえない。外面に平行叩き、内面にやや大振りの青海波文の当て具痕が認められる。曲面がほとんどなく、大甕の破片であろう。

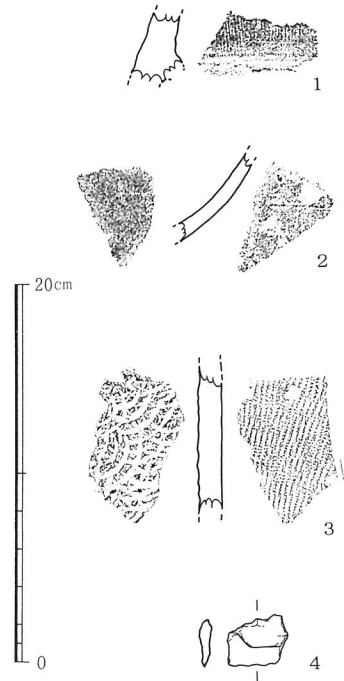
鉄器(4) 男狭穂塚の拝所に向かって左側の土盛り部分(本誌第四四号参照)で表採したものである。全体に剝離も甚だしいが、現状では安定している。当初の面やラインは確定できず、種別を特定できない。男狭穂塚に伴うかどうか明らかではないが、参考のため、図示しておく。

なお、現地での調査に対しては、西都市教育委員会荻瀬明宏氏に資材の提供等、多くの協力を賜った。

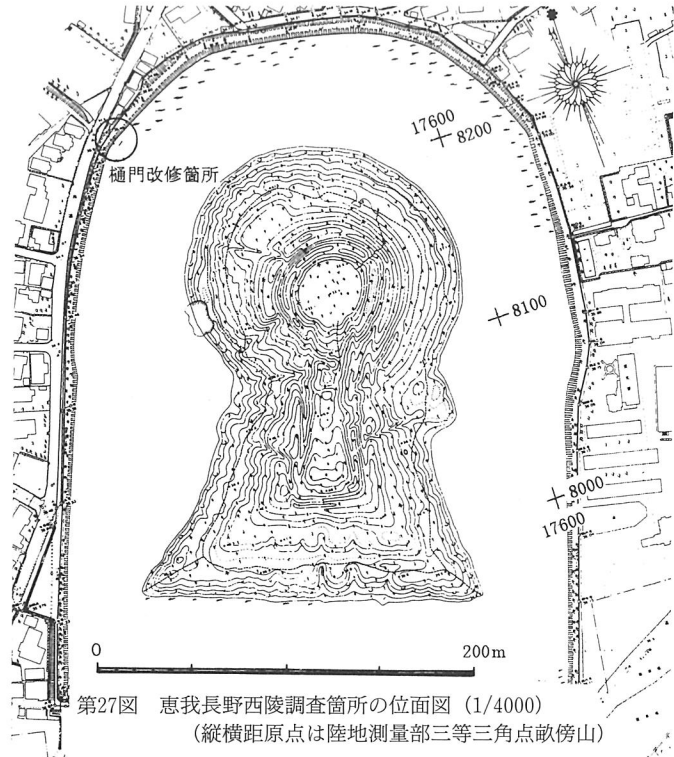
(福尾 正彦)

仲哀天皇 惠我長野西陵墳塋護岸その他整備  
工事箇所之立会調査

仲哀天皇の惠我長野西陵は、大阪府の古市古墳群西端付近に位置する全長二四〇メートル強の前方後円墳である。本誌前号で報告のように、平成八年一月に事前調査を行い、その結果を勘案しつつ、工法を定めたところである。工事は平成九年一月に発注されたが、護岸工事については掘削を伴わず、翌年三月に予定どおり竣工した。一方、堆積土除去と樋門改修箇所については、平成一〇年三月の掘削中と埋戻し時に立ち会った。堆積土除去は事前調査の所見をふまえ、近年の濠内堆積土内にとどめたため、新たな所見はなかった。以下、その樋門改修箇所の調査の概要を報告する（第27図）。



第26図 男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地の採集品 (1/4)



第27図 惠我長野西陵調査箇所之位面図 (1/4000)  
(縦横距原点は陸地測量部三等三角点畝傍山)

樋門改修箇所は外堤北西部の内法裾に位置する。この部分の外堤は既存余水吐設置のため、大きく立ち割られたところでもあり、さらにその下位を樋管が横断している。該所には樋門が二箇所があり、今回はその濠側の底樋部分を中心に、一部外堤側の上樋にかけての部分掘削した。涌水が多く、調査は難渋をきわめたものの、地層は以下の四層に区分で